Aoyama Gakuin Archives Letter

青山学院資料センターだより 2012.7



青山学院生徒の軍事教練 関東大震災前



青山女学院の授業(習字) 関東大震災前



第二次世界大戦の夜間空襲で被災した青山学院正門 昭和 20 年頃

これらの写真は、今年の1月に米国 Drew 大学構内にある The General Commission on Archives and History of The United Methodist Church (合同メソジスト教会資料館) が所蔵する写真を、デジタルカメラにて複写させてもらったものの一部である。そのおかげで青山学院の歴史的事実を裏付ける資料が新たに加えられることになった。

資料センター所蔵 貴重文献の史料 氣賀健生 —2 本多庸一召天 100 周年記念シンポジウム報告 嶋田順好 —4 資料センター日誌抄 —6 受入れ資料 —7 本多庸一召天 100 周年記念展示のお知らせ・利用案内 —8

資料センター所蔵

貴重文献の史料

青山学院大学名誉教授 氣賀健生

青山学院資料センター所蔵資料紹介の第一回として「本多庸一とその絶筆書簡」を紹介しました(本誌第一号)が、今回はその本多庸一の伝道者としてのスタートの時点におけるアメリカ・メソジスト宣教局との契約文書と、若い彼が青雲の志を抱いて横浜で勉学していた時の恩師ジェームズ・バラ(James Ballagh)にあてた弘前よりの英文書簡を紹介しましょう。これらの史料は北米ニュージャージー州マディソン市のドゥルー大学構内にあるMethodist Archivesに於て1991年に筆者が蒐集したものです。

まず宣教師Ballaghあての書簡。本多庸一は1872 (明治5) 年5月3日、宣教師バラから洗礼をうけ、成立したばかりの日本基督公会に参加します。時に満23歳。この日本基督公会は超教派主義を標榜し、次のようにうたっていました。

「我輩ノ公会ハ宗派ニ属セズ。唯主耶蘇基督ノ名ニ依テ建ル所ナレバ、單二聖書ヲ標準トシ是ヲ信ジ是ヲ勉ムル者ハ皆是基督ノ僕、我等、兄弟ナレバ、会中ノ各員全世界、信徒ヲ同視シテ一家、親愛ヲ尽スベシ。是故ニ此会ヲ基督公会ト称ス」これがいわゆる横浜バンドです。

1874 (明治7) 年11月、本多庸一は東奥義塾々頭として招かれ、宣教師イングを伴って故郷弘前に帰ります。John Ingはメソジスト教会宣教師として中国に伝道し、その帰途横浜に立寄ったところをバラに説かれて本多と行を共にして弘前に赴いたのでした。

さて、ここに紹介するのは本多庸一からBallagh にあてた英文の書簡です。日付からみて弘前メソジスト教会設立の直前のものです。本多は建て前上、横浜公会の会員のまま、横浜公会の分身として弘前公会を1875(明治8)年8月に設立しました。それから約1年後、この公会はメソジスト教会に移ります。

"My dear Teacher Ballagh"という呼びかけで始まる弘前からの1876 (明治9) 年1月15日付のこ

の手紙は、若き本多庸一の、現存する恐らく唯一 の英文書簡であろうと思われます。それだけに英 語表現が不完全で意を十分に汲み取り難い部分も ありますが、弘前に於て伝道と教育に邁進し始め た頃の彼のよろこびも苦労もよく見えて来ます。

「毎日曜日、この教会の人々は、神の恵みのも とに真理について信仰と知識に向って励んでいま す。24人のメンバーとその他4人が洗礼を受けよ うとしています」と近況をのべ、「イング先生は 毎日曜日と金曜日の夜、教えに来て下さっていま す」とイングに感謝しています。そして「今や迫 害は以前より遙かにゆるくなりました」と伝道の よろこびを語っています。本多が弘前にキリスト 教をもちこみ、伝道を始めた当初は、種々の迫害 にとり囲まれていましたが、本多家という津軽藩 重臣の出自に於て、本多庸一自身の才能・人物に 於て、そして使命感に燃えた誠実な情熱に於て、 「本多のヤソならば・・・」という信頼が人々の 白眼視を和らげ、漸くここまで漕ぎつけたという 想いがひしひしと伝わって来る内容です。そして 良い外国の宣教師を将来学校でも教会でも常に傭 えることが重要で、「プレスビテリアンやコング リゲーション (組合教会) やその他の教会よりも メソジスト教会の助けをかりる方が、より賢明に 思われます」とイングの考えを自分の考えとして 述べています。この書簡の後、間もなくバラ師に 宛てて長文の書簡を再び書き、そこでは本多が公 会を離脱して、バラの所属する一致教会に加わら ず、メソジスト教会に移ったことに対する一種の 弁明や主張がこまごまと書かれています。この釈 明の手紙の下書きは本多繁「本多庸一未発表文献」 『宮城学院研究論文集』Ⅱに収められています。

いづれにせよ、弘前教会がメソジストを受入れたことは、勿論イングの真摯な人柄の影響によるところが大きいと思われますが、本多が恩師バラに送ったこの書簡に接して、彼のメソジスト転向のいきさつが、よく見えてくるようです。最後にこの書簡は"Your's Humble Pupil in Christ"と結



ばれています。

さて、次に本多庸一が宗教と教育に生涯を捧げる決意を以てアメリカから帰国した時のいきさつを物語る史料を紹介しましょう。

1888 (明治21) 年9月から1890 (明治23) 年6月まで本多は第一回の渡米生活を送りました。「宗教教育の視察が目的」でありましたが、「政治方面にも視線が向いて」いました。「政治か宗教か」――前途の進路を思い悩んでいた唯中で、ペンシルヴァニア州ピッツトン駅近くの小橋上での列車禍危機一髪の体験を天の警告と受け止めた劇的な回心のエピソードは良く知られていますが、これを契機として政界のキャリアを断念し、宗教教育の道に専心するに至り、ドゥルー大学で神学を勉強した後、アメリカ・メソジスト宣教局の推薦を得て帰国します。その時の宣教局との契約 (Agreement) が残されているのです。そこには大要次のように記されています。

「Y. Hondaはその政治生活を全く断念して、メソジスト監督教会(Methodist Episcopal Church)の日本における宣教の仕事に全身全霊を捧げる決意を以て日本に帰ることに同意した。この契約は上記の証明である。本多は教会及び宣教局の権限によって委任された任務につき、報酬を受ける。彼は外国人宣教師としてではなく、日本人伝道者(native worker)として奉仕するために日本に赴くのである。上記の条件に宣教局は同意し、日本への渡航費として200ドルを超えない額を支給す

る。本多は25ドルを4半期毎に返済する。」

そして監督S. L. Baldwin、総主事 J. O. Peckと本 多庸一Yoitsu Hondaのサインがあります。

ところで、この本多庸一のサインですが、実は本多庸一はヨウイツかヨウイチかということが長年の疑問であったのです。彼自身はお国なまりがかなり強かったようで、津軽弁で"ヨウエヅ"に近い発音をしていたに違いありません。これが紛争のもととなっていたわけですが、録音がない以上キメ手がなく、ローマ字のサインは常にY. Hondaでした。ところがここで始めてYoitsuのサインに出会い本多庸一はホンダヨウイツであったことが判明したのです。その後学外の研究者の協力もあって、Yoichi Hondaという自筆のサインも見つかり、要は、彼自身、時と場合によってヨウイツとヨウイチを使いわけていたようだ、というのが、現在のところ、一応の結論です。

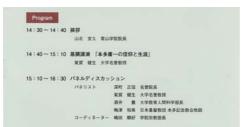
さて、本多はこうして日本に帰国するのですが、その途上で書かれたと思われる宣教局総主事Peck 宛の手紙があります。それによれば、1890(明治23)年6月4日にニューヨークを発ち、6月14日にサンフランシスコを出航して太平洋上に一週間、ホノルルに6月22日に着き、ここの教会で説教をしたという報告をPeckにしています。こうして無事日本に帰国し、東京英和学校総理(青山学院々長)に就任し、ここから本多の青山学院長17年間の凄絶な時代が始まるのです。

本多庸一召天100周年記念シンポジウム報告

青山学院宗教部長,青山学院大学国際政治経済学部教授 嶋田順好

2012年5月19日は、長く青山学院の歴史に記憶されるべき日となった。「本多庸一先生召天100周年記念式典」が、新築なった17号館の本多記念国際会議場の杮落しとして更新伝道会、日本基督教団本多記念教会、同弘前教会、学校法人東奥義塾、同弘前学院を共催者とし、弘前市、弘前市教育委員会の後援を得て、400名近くの方々が参集するなか、盛大に挙行されたからである。喜びと感謝のうちに、記念礼拝、胸像除幕式、記念シンポジウム、記念感謝会が、午後1時~7時まで開催された。以下では紙幅の都合上、記念シンポジウムのみの内容を紹介することにする。





本多庸一先生召天100周年記念シンポジウム次第

開会挨拶に立たれた山北宣久院長は、第一に十字架を負いつつ、キリストへの忠誠を貫いた本多の姿勢にならうこと、第二に本多が貞子夫人の人格を敬愛したように、青山学院はスクーンメーカー以来の女子教育の伝統を重んずべきこと、第三に本多の人格的感化により米山梅吉、万代順四郎等に代表される「Manを出さしめ」た教育的伝統を、絶やさず継承することの必要を述べられた。

続いて氣賀健生青山学院大学名誉教授より「本 多庸一の信仰と生涯」と題して基調講演がなさ れた。氣賀先生は、本多の生涯を第1期・生い立 ちから青年時代(1848-70)、第2期・横浜留学 とキリスト教入信(1870-74)、第3期・弘前時代 (1874-86)、第4期・アメリカでの転機(1889)、第 5期・青山学院院長時代(1890-1907)、第6期・日 本メソジスト教会監督時代(1907-1912)に分けて 大略以下のように語られた。

本多は、日本にキリスト教を定着させるために生涯を賭けた人物であった。明治の終焉と共に生を終えたように、本多はあらゆる意味で明治人であったが、同時代人さえも本多を把握しかねている。山路愛山は、「生まれつき偉かったのです」と本多を評したが、この言葉は何も説明していないようだが、実は最もよく本多を説明している。まさに本多を解釈する鍵は、人格においても、人柄においても大きい人という点にある。

この大きさは、本多が脱藩してまで武士としての志操を貫き、奥羽越列藩同盟に加わるも、一敗地にまみれた経験を通し、政治の現実が、良心や信義や原則論だけでは動かないことを、身をもって体験し、理想と現実、宗教と政治の狭間に立ち続けることの重要性を気づかされることによって一層豊かに体現されるものとなった。

1870 (明治3) 年、本多は藩命を帯び、洋学を修めるために横浜へ留学し、宣教師J.H.バラと出会う。その時バラが、自らを白眼視する日本人のために、声涙ともに下って祈る真摯な姿に打たれ、そのバラを支えた聖書の神、イエス・キリストに捉えられたのである。それを契機に本多は、神の前における人格の尊厳と人間の平等を説く近代市民社会の論理と倫理を知るに及び、これでなければ日本は救えないとの確信を与えられ、彼自身の愛国心の基礎にそれが据えられることになった。

1874 (明治7) 年、弘前に戻った本多は、メソジスト監督教会宣教師J.イングの協力を得て、東奥義塾を再興し、弘前公会(後の弘前メソジスト教会)、来徳女学校(現在の弘前学院)を創立。更に自由民権運動の旗手として県議会議員、議長を歴任し、持ち前の包容力をもって津軽と南部の対立を調停し、名議長ぶりを遺憾無く発揮した。既にこの時点で、本多は、その後の生涯の三本柱となった教育、伝道、政治の面において、その賜物を存分に発揮したことになる。

1887 (明治20) 年、本多は東京英和学校に校主 兼教授として招かれたが、翌年には年来の願いで あった米国への旅を敢行する。滞米中に本多は政 治か宗教かの選択に懊悩するも、鉄道奇禍に遭遇 し、九死に一生を得て回心、妻貞子の「断然按手 礼を保持せよ」との低い声にも促され、教育と伝 道の道へ進むことを決したのである。

1889 (明治22) 年に帝国憲法が発布され、翌年教育勅語が渙発されることにより、天皇制絶対主義の論理的・倫理的基礎が確立される時期に、奇しくも本多は米国から帰国した。その直後に井上哲次郎の『教育と宗教の衝突』が出版されるに及び、いち早く事の重大性を見抜き、キリスト教界側では、まっ先に反論を展開したのが本多であった。キリスト教は教育勅語とは趣きを異にするが、抵触はしないとし、国家と天皇に対する明治人らしい率直な尊崇の念を吐露している。

本多は、意気高く逆流に棹さして進む人物ではなく、原則論に忠実な理想家であるよりも、目的を実現するために、大局的な効果を読んで手を打つ現実家であった。その本多の姿勢が、最もよく発揮されたのは、文部省訓令第12号の発令により、上級学校への進学と徴兵猶予の特典を剥奪されたキリスト教学校の権利回復のために、井深梶之助と共に粘り強い交渉を政府と続け、実質的にその効力を無きものに至らせ、日本のキリスト教学校の存続を守ったところに現れている。

以上、長年の本多研究の成果を凝縮し、含蓄に富んだ本多像を提示してくださった氣賀先生の基調講演の後に、深町正信名誉院長、酒井豊教育人間科学部長、梅津裕美本多記念教会牧師が、これまた聴き入る者たちに励ましと様々な気づきを与える示唆に富んだ発題をしてくださった。

深町先生は、米国・メソジスト監督教会(北)、カナダ・メソジスト教会(カナダ)、米国・南メソジスト監督教会(南)の日本伝道の歩みを振り返りつつ、これら三派を1907(明治40)年に合同に至らせ、日本メソジスト教会の初代監督に就任した本多の貢献を紹介された。偏狭な教派主義を超えた公会主義の観点から、本多が国民的自由教会の理念のもとに、平岩恒保(カナダ)、吉岡美國(南)等と協力し、米国本国における合同メソジスト教会の成立より32年も早く、三派合同を実現に至らせた指導力と粘り強い交渉力は、高く評価されて然るべきことであろう。

酒井先生は、メソジストとしての本多の特徴を 紹介しつつ、彼の「私立学校の必要」と「国士論」 という論文並びに説教に注目し、教育史の観点から本多の功績を考察された。すなわち、帝国大学が「国家ノ須用ニ応スル」人間の形成を目的とするのに対し、本多が、「現国家を通じて、更に高き更に大なる天国でふ霊的道義的国家を望み、又天国の義を稽へて、現国家をより清くより正しく向上せしむる」人材の育成に情熱を注いだことを明らかにし、その伝統を青山学院が継承することの重要性を熱く説かれた。

梅津先生は、植村正久、井深梶之助という横浜バンド以来の本多の盟友たちが、妻を尊敬し、新しいタイプの夫婦像を示したことに触れ、本多自身も、知識学芸を備えた女性が社会で活躍することを喜び、妻貞子が弱い立場の女性を救うために婦人矯風会の活動に関わることに十分な理解を示したことを語られた。また本多が、青山女学院の目的を「基督の妹となり、天父の膝下に楽しむ天国の女子を養成するにあり」とし、「新しい女性観」「新しい家庭観」をもって、武士社会にはなかった福音に基づく「人格共同体」を日本に形成するという幻を示し、実践したことを告げ、その志を我々が継承することの重要性を説かれた。

続くディスカッションで、深町先生は、本多 が教育の二大目的として「よき人をつくること」 と「よき国民をつくること」を挙げ、そのために こそキリスト教教育が不可欠であると述べたこと や、武士であった本多が、「祈行合一」のもとに キリストを主君と仰ぎ、献身の限りを尽くして伝 道者の歩みを全うした姿に言及された。また、酒 井先生は「私立」とは「私が立つことを学ぶ学校」 であるとのご自身の理解を示しつつ、個人が主体 的な人格として育まれる「私立学校の必要」を、 1893年の段階で説いた本多の洞察を、改めて高く 評価された。更に梅津先生は、バラの高潔な人格 にひかれてキリスト者とされた本多の経験は、教 育における福音的人格との出会いが、どんなに重 要であるかを深く示す出来事であるとの意見を述 べられた。最後に氣賀先生は、念を押すように、 本多が目的達成のため原則を譲ることなく、しか し、手段においては大胆な妥協をしたからこそ、 青山学院の存続が守られ、三派合同が実を結んだ 事実を正しく承認し、評価すべきことを説かれた。

本多は政治の道を棄て、教育と伝道の道へ進んだが、本多こそは、理想と現実の狭間に立って十字架を負い、青山学院と日本の教会のためになくてはならない、神の国のための「政治」をなした士道に生きるキリスト者であったと言えよう。

2011 年度後期





(抄録)



10月

閲覧 (青山)

- ・大学教員、『護教』マイクロフィルム5巻
- ・元職員、校史調査のため学院史資料(4回)
- ・一般の方、杉本鉞子(校友)調査のため『護教』と同マイ クロフィルム、美以小学校関係資料ほか(2回)
- ・一般の方、今井信蔵牧師の記事調査のため年会記録と『護 教』記事索引

閲覧 (相模原)

- · 本学名誉教授、本多庸一関係資料多数
- ・本学職員、『青山評論』マイクロフィルム
- ・校友、管弦楽団楽友会記念誌編集の為、『青山学報』、 『青山学院大学新聞』(2回)

レファレンス

9件(諸橋轍次先生が、授業中青山学院創立75年を祝して黒板に自作の漢詩を書いてくれたが、その詩が残っていないか、ほか)

来室 (青山)

・一般の方、資料の扱いについてのご相談

業務

- ・清家篤様より、本多庸一揮毫の書(マタイ伝の部分)を本多庸一記念展示のため借用
- ・大学メディアライブラリーより、1962年ライシャワー米国 大使講演のオープンリールテープと同CD各1点移管
- ・本部広報部より、資料段ボール1箱移管
- ・大学広報入試センター広報課より、大学関係写真段ボール 2 箱移管
- ・大学図書館本館リサイクル・ブックフェアー用に、相模原 の資料センター保管図書段ボール12箱分供出
- ・事務長、本多庸一先生召天100周年記念プロジェクト会議出 席(青山キャンパス)
- ・事務長、改訂版『本多庸一』の打合せ出席(青山キャンパス)
- ・資料センター運営委員会開催 (青山キャンパス)

11月

閲覧 (青山)

- ・元職員、校史調査のため学院史資料(3回)
- ・本学学生、授業のため、構内略図、『青山学院100年』
- ・大学50年史編集者の方、『青山学院大学五十年史』、『同資料編』、『青山学院120年』、『青山学院女子短期大学25年の歩み』、『50年の歩み』
- ・一般の方、杉本鉞子(校友)調査のため『美以教会婦人年 会記録』、『来日メソジスト宣教師事典』ほか(2回)
- ・一般の方、本多庸一が写っている写真確認のため『護教』 閲覧(相模原)
- ·本多庸一子孫3人、本多庸一関係資料
- ・一般の方、伝記著述のため『青山学院大学五十年史』、笹森 順造・米山梅吉資料、緑岡小学校資料ほか
- ・他大学教員、伝記著述のため江角ヤス(旧教員)資料
- ·他大学院生、本多庸一関係資料

レファレンス

15件(明治43年9月10日付の本多庸一が写っている写真が何の会合写真か知りたい、ほか)

来室(相模原)

・本学職員、資料センター相模原事務室を見学

業務

- ・北陸朝日放送へ、『評伝 勝田銀次郎』 1 冊寄贈
- ・大学広報入試センターより、新聞広告原稿(大学設置・学 院創立について)校正依頼あり
- ・青山分室保管ブックフェアー用図書、段ボール1箱分供出

- ・事務長、改訂『本多庸一』の打合せ出席(青山キャンパス)
- ・事務長、本多庸一先生召天100周年記念プロジェクト会議出 席(青山キャンパス)

12月

閲覧 (青山)

- ・大学教員、『Christian Movement in Japan』 1903年~1924年ほか(3回)
- ・元職員、校史調査のため学院史資料(3回)
- ·他大学教員、『西洋娘節用』
- ·他大学教員、『Christian Movement in Japan』1921~1924 閲覧(相模原)
- ・本学職員、業務のため『剣道塾長 笹森順造と東奥義塾』 レファレンス

6件(一般の方より、所蔵葉書の差出人・関根という人物について、ほか)

来室 (青山)

・校友へ、『地に播かれた三粒の種』のDVD1枚寄贈 業務

- ・事務長、新白河在住の校友宅に本多庸一揮毫の書(創世記 の部分)寄贈の受け取りのため出張
- ・茅ヶ崎市立美術館に、佐々木壮六画「化石の杜」(相模原 資料センター保管)を貸出
- ・徳富蘇峰に宛てた本多庸一の書簡 9 点(コピー)の解読を 依頼
- ・校友の親族より、曾祖父の弟・青柳英太郎の明治22年の東京英和学校卒業証書(英文)と、関連写真について確認に来てほしいとの依頼あり
- ・本部広報部より学報原稿校正依頼あり(ウェスレー像に関して)
- · 『Aoyama Gakuin Archives Letter 』第5号発行
- ・広報部へ『地に播かれた三粒の種』DVDを1枚配付
- ・宗教センターへ『小伝 間島弟彦』を1冊配付

1月

閲覧 (青山)

- · 本学名誉教授、本多庸一関係資料
- ・元職員、校史調査のため学院史資料 (4回)
- ・一般の方、杉本鉞子(校友)調査のため『Minutes of the Woman's Conference of the M.E.C.』のマイクロフィルム、『しなやかに夢を生きる』

閲覧(相模原)

- ·本学学生 2 人、『青山学院大学五十年史』
- ・本学学生、授業レポート作成のため、「創立周年の起算について」
- ・本学教員、『津軽を拓いた人々 津軽の近代化と基督教』 レファレンス

8件 (Bible Woman を日本語ではどのように訳しているか、ほか)

来室 (相模原)

・大学新執行部メンバー、見学のため

業務

- ・2012/1/8 (日)~15 (日) 事務長、学院宣教師 (大学教員) と共に米国のThe General Commission on Archives and History of the United Methodist Church (合同メソジスト教 会資料館) へ写真資料収集のため出張
- ・博物館相当施設の件で東京都地域教育支援部管理課文化財 管理課へ問い合わせ。
- ・大学日本文学科教員より、額装した中原中也の詩を資料センターに移管したいとの相談あり

2月

閲覧 (青山)

- ・本学名誉教授、本多庸一伝記調査のため『護教』ほか(5回)
- ・元職員、校史調査のため学院史資料、他大学年史(3回)
- ・一般の研究者、『英吉利文範』2 冊
- ·他大学教員、日曜学校資料

閲覧(相模原)

・一般の方、『使徒』18号

レファレンス

5件(大学教員より、本多庸一伝道日誌について、ほか) 来室(青山)

- ・教員ほか、明治期基督教図書データベース作成作業 業務
- ・専門職大学院事務室より、1991年~2004年の国際政治経済 学部寄附講座資料(主に授業の録音・録画資料)を移管し たいとの相談あり
- ・山梨県日下部教会会員より、日下部教会所蔵本多庸一揮毫 の扁額について画像提供の申し出あり。
- ・小室太一(校友)親族からの情報提供により、本多庸一や 青山学院のことが書かれている図書『記憶をたどりて』 (小室太一著)を古書店から購入
- ・本部広報部より『青山学院総合案内』年表部分の校正依頼あり

3月

閲覧 (青山)

- ·大学名誉教授、『本多庸一』(3回)
- ・元職員、校史調査のため学院史資料(2回)
- ·岩村透(校友)子孫、『青山学院九十年史』、岩村透書簡
- ・校友、「我が師、我が友」ほか
- ·他大学教員、日曜学校関係資料
- ・一般の方、所属教会創立期の写真を探すため、「宣教師が 撮った日本」写真ファイル
- ·一般の方、15世紀ラテン語聖書『Biblia Latina』ほか
- ・一般の方、『日本メソジスト教会年会記録』、『護教』ほか (2回) レファレンス

3件(豐田實院長の日本翻訳家協会会長在職年月日について、ほか)

来室 (青山)

- ・道山秀樹様から、明治43年9月10日の本多庸一が写っている写真を本多庸一記念展示のため借用
- ・教員ほか、明治期基督教図書データベース作成作業(2回) 業務
- ・大学学務部教務課へ『地に播かれた三粒の種』のDVD送付
- ・事務長、平塚市の伊藤健太郎氏宅へ本多庸一揮毫の書を借 用のため出張
- ・事務長、横須賀基督教社会館へ本多庸一揮毫の書(ウイリアム C. ブライアントの詩の部分)(阿部志郎様所蔵) 借用のため出張
- ・大学広報入試センターより、パンフレットの校正依頼あり
- ・事務長、本多庸一先生召天100周年記念プロジェクト会議出 席(青山キャンパス)
- ・本多庸一記念展示のため、本多家より資料を借用・・・知行書、本多庸一揮毫の書「主の祈り」、金製懐中時計、銀製懐中時計 計4点
- ・展示ケース6台を相模原事務室から青山展示室へ搬送
- ・3/24(土)(大学卒業式)から間島記念館2階にて「本多庸一 先生召天100周年記念資料展示」開始。3/24入場者53人
- ・事務長、博物館構想打合せに出席(青山キャンパス)
- ・本部広報部より、WEB掲載用写真データの提供依頼あり

(学内部署からの資料は除く

寄贈(抜粋)

- ■茗荷雅夫(校友)様より、『神宮球場ガイドブック』 Vol.51、52(2011年春、秋号)
- ●吉田恵子様より、中学部卒業50周年記念のネクタイピン・カフスボタン 1940年、初等部児童募集ポスター(手書き)昭和38年度、中等部第2回卒業記念アルバム 1951年3月、ほか
- ●横溝達夫(校友)様より、『岩の会だより』No.21 大学第 2 部宗教部岩の会 2011年10月
- ●横澤誠一(校友)様より、『余韻』第58号(終刊号) 大学新 聞編集局OB会 2011年10月
- ●雨宮剛(校友・大学名誉教授)様より、『すべては神様のプログラム』鈴木伶子著 2009年10月、『零戦の真実』・『零戦の運命』・『零戦の最期』坂井三郎(校友)著 1995年~2003年、『CROSSES AND TIGERS』 永瀬隆(校友)著・Watase Masaru英訳 1990年、ほか
- ●山北宣久(院長)様より、『下関丸山教会の百年』日本基督教 団下関丸山教会 2007年11月、『藤倉学園90年史―霊魂は神に 受け入れられ』社会福祉法人藤倉学園 2010年6月、ほか
- ●池田羊子(校友)様より、萩チョン会(昭和24年女子高等 部卒業クラス会)の記録 1970年~2011年 2分冊、女子高 等部時代の恩師・卒業記念・クラス会などの写真多数
- ●大学グリーンハーモニー合唱団OB会様より、『グリーン ハーモニーOBニュース』No.44 2011年11月
- ●飯久保知信(校友)様より、『十戒、その今日的意味を学ぶ』近藤勝彦著 1997年11月、『ハンセン病だった私は幸せ 子どもたちに語る半生、そして沖縄のハンセン病』金城幸子著 2007年5月、『われ山に向かいて目を上ぐ 伊藤秋夫写真集』伊藤秋夫(校友)著 2010年4月、ほか
- ●田村忠幸(校友)様より、青山学院教会日曜学校集合写真於:青山学院花岡山 1936年[複製]
- ●本多謙様より、私家版『コスモス 母の思い出』本多謙編 2007年秋
- ●金山屯(校友)様より、『男の花道 白坂・卯の花街道』金

- 山屯著 2008年5月、『白川二所の関 ようこそまほろばみ ちのく』かなやまじゅん著 2010年10月
- ●松岡正樹様より、「記録」[大正6~8年、手書き] 日本メ ソヂスト車道講義所 [名古屋] (次頁写真①)
- ●北陸朝日放送様より、「ひと物語 ~革命の荒波を越えて ~」2011年12月15日放映DVD [勝田銀次郎(校友)資料]
- ●茅ヶ崎市立美術館様より、美術展「詩情の画家 佐々木壮 六」図録 2012年1月(本学院所蔵絵画掲載)
- ●本多セツ様より、福音伝道隊の写真(複製・明治31年前後、工藤まき(校友)が写っている)
- ●アパ・ルーム事務所様より、『アパ・ルーム』渥美彪編 2011年1・2月(No.361)~2011年11・12月(No.366) 各号 3冊(日本語版、英語版、日・英・韓国語版)
- ●校友会青盾会事務局様より、校友会青盾会会報『蔦の輪』 第29号 2011年12月
- ●白銀教会様より、『白銀教会100年史』2011年12月
- ●尾野奈津子(校友)様より、『青燈Ⅱ』青山学院女子短期大学同窓会国文学科会青燈会発行 2011年11月
- ●中等部緑窓会様より、『緑窓』1~19のうちの欠号分[コピー資料含む]1992年4月~2010年5月
- ●理工会様より、『青山学院理工会会誌』59号 2011年12月
- ●猪狩満信(校友)様より、男子高等部卒業礼拝次第・第3回卒 業証書授与式次第 1951年3月、新聞記事「青山学院中等部 サッカー部」(東京中日新聞 昭和41年4月26日より)、ほか
- ●兼松幸子(校友)様より、本多庸一関係資料多数
- ●保村和良(校友)様より、本多庸一説教及講演草稿写真「成徳三要」「戦争後之日本」(解読文つき)、ほか
- ●高橋康子(校友)様より、本多庸一から波多野傳四郎宛の 絶筆書簡(複製)明治45年3月20日付、『聖書』ジ・ピ・ピ ヤソン編 明治40年6月、ほか
- ●山口美南子(校友)様より、『いんまぬえる』創刊号〜終わり号(初等部文集)3年さくらぐみ 1950年4月〜1951年3月 (次頁写真②)、『思い出の文集』初等部卒業記念 1954年 3月
- ●高等部野球部後接会様より、高等部野球部ベスト8記念タオル 2011年
- ●高等部同窓会様より、『高等部同窓会報』Vol.62 2011年11月
- ●滝澤民夫様より、滝澤民夫著「石井十次と増野悦興」 (『石井十次資料館研究紀要』第9号抜刷) 2008年8月
- ●他大学·学校 年史·紀要類 多数

- ●徳富蘇峰記念館所蔵「徳富蘇峰宛本多庸一(第2代院長) 書簡」(コピー) 明治期 9通
- ●『救世軍歌集』山室軍平編、救世軍日本本営 大正5年
- ●「青山学院男子女子高等部 卒業記念音楽会プログラ ム」、青山学院 昭和25年
- ●「青山学院創立第76周年記念 音楽会プログラム」、青山 学院 昭和25年
- 「AOYAMA GAKUIN GRAND CONCERT プログラム |、 青山学院 昭和25~27年頃
- ■『詩集 ある青春』福永武彦著、川上澄生(校友)木版挿 画あり、北海文学社 昭和23年(写真3)
- ●『蘭梦抄(ランボオ)』森谷均編纂、東郷青児(校友)の 絵あり、秀英社 昭和25年
- ■『をんな』第2巻第1号~12号、第3巻第1号~10号 全22冊 山澤俊夫編輯、大日本女学会 明治35年1月~明治36年10月
- ●『絵入お伽噺 新約列子』五十澤二郎訳、川上澄生(校 友) の版画あり、版画荘 昭和12年
- ●『記憶をたどりて』小室太一(校友)著、(株)文化新聞社 昭和63年
- ●『第8回世界日曜学校大会大阪歓迎会記念帖』大阪代員歓

迎会編、大阪代員歓迎会 大正10年(写真④)

- ●『傳道師 完』戸川安宅著、福音社 明治23年(写真⑤)
- ●『縛魔立正論 全』森川會殷著、森川會殷 明治24年





写真①

写真②







写真(3)

『本多庸一召天 100 周年記念資料展示』のご案内

青山学院第2代院長として、明治期キリスト教会の重鎮として多大な功績を遺した本多庸一は、1912年3月26日に天 に召されました。召天100周年を記念して青山学院では各種行事を行っており、その一環として、本多庸一の資料展示 を開催中です。自筆の説教原稿や、今回のため特別にお借りした資料なども展示しています。ぜひご来場ください。 場所:間島記念館2階展示室(青山キャンパス) 会期: ~2012年11月30日(金)まで



本多庸-

開室日

10時~15時開室 10時~16時開室

8月							
B	月	火	水	木	金	±	
			1日	2日	3日	4日	
5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日	
12日	13日	14日	15日	16日	17日	18日	
19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日	
26日	27日	28日	29日	30日	31日		

月	火	水	木	金	±
					1日
3日	4日	5日	6日	7日	8日
10日	11日	12日	13日	14日	15日
17日	18日	19日	20日	21日	22日
24日	25日	26日	27日	28日	29日
	3日 10日 17日	3日 4日 10日 11日 17日 18日	3日 4日 5日 10日 11日 12日 17日 18日 19日	38 48 58 68 108 118 128 138 178 188 198 208	3日 4日 5日 6日 7日

10月						
日	月	火	水	木	金	±
	1日	2日	3日	4日	5日	6日
7日	8日	9日	10日	11日	12日	13日
14日	15日	16日	17日	18日	19日	20日
21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日
28日	29日	30日	31日			

11月						
日	月	火	水	木	金	±
				1日	2日	3日
4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日
11日	12日	13日	14日	15日	16日	17日
18日	19日	20日	21日	22日	23日	24日
25日	26日	27日	28日	29日	30日	

上記以外に観覧のご希望がある場合は、事前にご相談ください。 お問い合わせ先:資料センター ダイヤルイン 03-3409-6742 (内線11345)

青山学院資料センター利用案内

資料センターは、青山キャンパス再開発計画に伴い、2005年11月17日に間島記念館から2箇所に臨時移転いたしました。移転期間中、常設 展示はお休みします。閲覧希望の場合は、余裕を持って連絡してください。

★資料の閲覧曜日、時間

特定の研究目的を持って閲覧を希望される方々に青山学院史、 明治期キリスト教関係資料などを公開。

- 相模原キャンパス N棟N403 月曜日~金曜日 9時30分~17時
- 青山キャンパス ウェスレー・ホール 2階 (完全予約制) 火曜日 9時30分~17時 土曜日 9時30分~13時

(2キャンパスとも、昼休み 11時30分~12時30分)

★休室日

大学 教員1名

日曜日・国民の祝日・クリスマス・年末年始・その他青山学 院が定める休日

- ★夏期休業期間の開室(8月5日~9月15日)
 - 2キャンパスとも8月5日~8月12日は一斉休業期間

 - 相模原キャンパス 月・木・金 青山キャンパス 火のみ (完全予約制) 9時30分~16時(昼休み 11時30分~12時30分)

★お問い合わせ・連絡先(2キャンパス共通) TEL: 03-3409-6742 FAX: 03-3409-8134

(相模原) 〒252-5258 神奈川県相模原市中央区淵野辺5-10-1 (青山) 〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25

URL http://www.aoyamagakuin.jp/mcenter/

資料センター運営委員

(任期2011年4月1日~2013年3月31日)

清水

院長 (職務上) 山北 宣久

常務理事1名(職務上) 浅野 博嗣 (2012年4月~) 学院宗教部長 (職務上) 嶋田 順好 大学図書館長 (職務上) 優美子 三村

女子短期大学 教員1名

谷本 信也 (2012年4月~) 高中部 (高) 教員1名 佐藤 隆-高中部(中) 小田井 孝 教員1名

初等部 教員1名 窪田 靖 (2012年4月~)

幼稚園 教員1名 川島 祥子 総局長 (職務上) 資料センター事務長(職務上) 傳農 和子

資料センタースタッフ人数

専任 2人 派遣 2人 パートタイム 1人

Aoyama Gakuin Archives Letter

信行

青山学院資料センターだより

2012年7月25日

青山学院資料センター編・発行

印刷:三美印刷株 1,500部